

国木さんとヒーローア
カデミア

康頼

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

僕のヒーローアカデミア × 十チツク姉さん（国木さん）

目次

人助けチツク	1
プールチツク	14

人助けチツク

それはある日の放課後のこと。

いつものように、緑谷出久は、麗日お茶子と飯田天哉と共に帰路についていた。

「いやー、今日の訓練は大変だったね飯田くん」

「ああ、まさか相澤先生からあんな言葉を聞けるなんてな」

「そうやね。その後の轟君の反応もびっくりやけどね」

「確かにそうだ」と普段通りの他愛のない会話をしながら歩道橋を歩いていると、

「む、あそこにいるのは、上鳴くんと峰田くんじゃないか？」

「あ、ほんとや」

歩道橋を降りた路地先に立つ二人の姿を確認した。

二人は、アロハシャツを着た二人組の男達に囲まれていた。

異形型の個性のせいか、上鳴よりも遥かに大きな体を持ち、二人に向かって怒鳴りつけている。

「てめえらよ、人にぶつかっておいて謝って済むと思ってるのか？ オラ!!」

「誠意見せろや、出すもんあるだろうが！ オラ!!」

明らかに因縁をつけられていた二人は、目の前の男達に完全に圧倒されていた。

峰田も上鳴も、共に日本最高峰であり、全国トップクラスのヒーロー科に所属するほどの逸材であったが、あくまで見習いですらなく、公共の場での個性の利用は禁じられている。

身体面のフィジカルも、二人ともそれほど高くなく、明らかにアロハシャツの男達の方が上と言っている。

「出すもんってなんだよ……」

「涙じゃねえ……」

蒼い顔をして現実逃避している二人に対し、男達は苛立った様子で声を荒げる。

「てめえ、ちよつと雄英に入ったからって調子こいてんじゃねえぞ！ オラ!!」

「ちよつと面貸せや！ オラ!!」

男達によって路地の中へと連れていかれる上鳴達を見て、緑谷が慌てて行動を起こす。

「大変だ、助けに行かないとっ!!」

「ああ、そうだな!!」

1-Aが誇る正義感の塊である緑谷と飯田が慌てて、階段を下りようとする。

しかし、その二人に待ったをかけたのは一緒にいた麗日である。

「ちよ、二人とも、一回冷静にならんと」

そう言って止めた麗日の意見はこうである。

個性が使えないのは、緑谷達も一緒であり、止めに入ることができても、抑えることができないだろう。

先程の男達の風貌や態度からしてヴィランの可能性があり、そうなればまだまだ学生の身である緑谷達では手が余る。

反撃をしてみれば、個性を無許可で使ってしまったことにより、処罰されるかもしれない。

故にまずは警察、そしてヒーローへの連絡が先ではないか？

という麗日の提案に、二人は頷くしかない。

だが、それでも三人ともが目の前の状況に黙っていられるほどの人間ではなかった。

「くそ、どうすれば……」

「飯田君、もしも二人に何かあったら問題だ、まずはここから移動して様子を窺おう」
麗日が警察に電話している間、自分自身が何もできないことに怒り震える飯田に対し、緑谷も同様に冷静に努めようと提案する。

そんな二人の肩を叩くものが現れた。

「状況は理解したよ、ここは俺に任せてくれないか？」

「国木さん!!」

現れたのは、緑谷達のクラスメートである国木という男であった。

清潔感のある黒髪で、爽やかな笑顔、そして中学時代に野球で全国制覇を成し遂げた身体能力を持ち、入試試験において、爆豪勝己すら上回り成績一位を誇る稀代の秀才。

クラス一のイケメンボーイと称される轟焦凍と双翼とされるイケメン、それが国木という男である。

それらの理由を含め、クラスの男子から同学年なのに国木さんと呼ばれている。

「出久、悪いが荷物を預かってくれるかい?」

「え、でも……」

緑谷に荷物を預けた国木は、そのまま歩道橋の上から飛び降りると、そのまま俊敏な動きでシユタシユタと駆けて路地と消えてしまった。

「ど、どうしよう?」

「とにかく、俺達も急ごう」

突然、現れた国木に圧倒されていた三人も我に返り、そのまま国木に続くように階段を下りていく。

そしてその頃、路地裏では。

「オラオラオラオラッ!! てめーらしい加減に、オラッ!!」

「オラアアア!!」

圧倒的なまでの男達——ヴィランの勢いに上鳴達は震えるしかない。

それは仕方ないことだ。

右側に立つトラ顔の男、というよりもトラ人間である男の名は『虎司走司』というヴィランであり、犯罪歴は世界最強のピンポンダッシュの名手とされるほどのピンポン達者であり、彼による被害は優に百を超えられている。

そして左側に立つゴリラ顔の男、というよりもゴリラ人間の名は『五里夢中』という名のヴィランであり、犯罪歴は業界屈指のストーカーであり、余りのしつこさから被害女性からのブレインバスターを百回ほど喰らった程の傑物である。

そんな男達の前にヒーロー候補生の二人と言えど、恐怖を感じてもおかしくないだろう。

「ッ、怖えええええ」

「オラって言われるのスゲー怖ええええ」

目の前のヴィランにオラ突かれる二人には、救いの手はないのか？

しかし、そんな二人に救世主、ヒーローが現れた!!

「待てえー!!」

突然、路地に響く声に四人は示し合わせたかのように同時に視線を向けた。そこにいたのは、威風堂々とした立ち姿で鋭い眼光を飛ばす男がいた。

「そいつらを離してもらおうか」

「国木さん!!」

現れたクラスメートに、二人は思わず声を揃えて名前を叫ぶ。

そんな態度を見て、苛立ったように二人組のヴィランは、国木の前に立つ。

「ああ？ 何だてめえは？」

「関係ねえだろ」

「二人は、俺の大切なクラスメートなんでね」

先程の上鳴達同様に脅しにかかるヴィランに対し、国木は一步も引くこともなく、毅然とした態度で迎え撃つ。

そんな国木を見て、ヴィラン達は面白なさそうな顔をしていたが、ふと何か思いついたか、突然笑い声を上げる。

「まさか、お友達のピンチを助けに来るとは、まさしく雄英の生徒っていうわけか、オラツ!!」

「で、俺達二人を相手にしてただで済むと思ってるのか、オラツ!!」

ヴィラン達と違い、ヒーローではない国木に個性を使うことはできない。もしも使つてしまえば、国木の輝かしい経歴に傷が入つてしまうだろう。そこを突いたヴィラン達は汚い、本当に汚い。

「それとも何か？ お前が出すもの出してくれんのか？」

「そうしたらこの二人共ども無傷で返してやんよ……あ、オラッ!!」

脅しにかかる二人に対し、国木は眉をピクリとさせ、鋭い視線を二人にぶつけた。

「出すものだと？」

そう言つて国木は両手を徐に広げて、そして掌を合わせた。

ボツという破裂音と共に、国木の制服の上着が弾け飛ぶ。

そして現れたのは、鍛えに鍛えた国木の金剛の肉体と——

「さあ、出したぜ？」

黒色のブラジャーであつた。

突然、目の前に起こつた国木の奇行行動に、先程までオラついてたヴィラン達も、恐怖に震えていた上鳴達も動きを止める。

まさしく思考停止、時は完全に止まつていた。

そんな中いち早く行動を移したのは国木である。

「? ……なんだ？ 物足りないのか、欲張りめ！」

今度は両腕を下から上へと振り上げる。

そうするとブラの肩紐が千切れ、ホックが外されるとそのまま虎司の顔へと飛来する。

微かな音を立て、虎司の顔に引つかかったブラを見て、国木は不敵な笑みでこう告げる。

「やるよ。この欲張りめ！」

そうしてようやく状況が把握できたのか、未だに固まっている虎司の肩を五里が叩く。

「は、はっはっはっ……なんだコイツ。おい、こいつも一緒にやっちゃまうか？」

平常心から程遠い明らかな動揺に揺れる五里の言葉に、虎司が唾を呑みこむ。

「いや、待て……奴の身体をよく見てみる」

そして二人は国木の身体を改めて見る。

一片の緩みもなく、鍛えに鍛えた肉体は、微かな輝きを見せる。

それでいて全身をよりシャープに鍛えた国木の肉体の前に、微かなリーチしか勝つことができないヴィラン達の足は、知らず知らずの内に一歩後退していた。

明らかに怯むヴィラン達を前に、国木はゆっくりと歩みを進める。

「俺は知っている。お前達のようなヴィランの心を正すのは、暴力や正義ではない。

……無償の愛だ」

そして国木は動き出す。

「イヤホー!!! 抱きしめてやるぞ!!!」

両手の掌を後頭部に当て、両足を蟹股にすると腰を前後に振り始める。前後のピストン運動により、推進力を得た国木はヴィランに接近する。

「こんなチャンスは、めったにないんだ!!!」

突然の奇行に、ヴィラン達は思わず、背を向けて逃走を開始した。

そして上鳴と峰田の間をすり抜けて、そして国木が現れた。

ヴィラン二人を追い払った国木は二人を安心させるかのように、両手を二人の肩に置く。

「逃がさんぞ」

それは絶望の宣告だった。

「ひっ!!？」

「俺らも!!？」

国木が突入して程なくして、路地の入口に辿り着いた緑谷達だったが、突然走ってきたヴィラン達に道を譲るように避ける。

先頭を走るのは恐怖で顔を歪めたゴリラ顔の男と何故か上鳴であり、それから少し遅れるようにトラ顔の男と峰田が現れた。

途中、峰田が緑谷達の前でこけてしまったが、傍にいたトラ顔の男が手を差し伸べて

起こすと、そのまま手を繋いで走り去ってしまった。

「……………どういふことなんだ？」

「さあ？」

状況を把握しきれない緑谷達は首を傾げるしかなかったが、程なくして上半身裸の国木が現れた。

腰を振りながらヤホウーと叫ぶ国木に、緑谷と飯田は、状況を確認しようと近づく。

その瞬間、笑顔の国木に肩を叩かれた。

「今度こそ、逃がさんぞ」

それだけで十分だった。

飯田は自身の個性を使って走り去り、緑谷もまるで初めて麗日を助けた入試の日のような大ジャンプを見せ、国木の拘束から逃れる。

残されたのは、呆然と立ち尽くす麗日と、腰を振りながら上鳴達が去った方向に歩み始めた国木だけである。

程なくして、通報により現れたパトカーに乗った警察官が現場に到着する。

そしてそのまま、国木に上着を被せると、職務質問を開始する。

「んー君の話は矛盾しているなあ、じゃあそのヴィラン達はどこに行っちゃったの？」

「あーそうか、そうか」

結果は言うまでもないだろう。

「いいから、乗りなさい」

そのまま国木を乗せた。パトカーは走り出し、その場には麗日だけ残された。

そして一人残された麗日は、パトカーの走り去ってしまった方に視線を向け、国木が最後まで叫んでいた言葉を口にする。

「いやほー」

こうして人知れず平和は守られた。

完。

プールチック

それは夏の日のこと。

プールでの水難訓練という名の名目の競泳大会が終了し、男子全員が片づけを終えて服を着替えていた。

こういう時、峰田や上鳴などが隣の女子更衣室に興味津々で胸ワクワクをしていのが、生憎女子は片付けがなく既にプールも更衣室も出て行った後だ。

故に、血涙を流して悔しがる両名を見るのが、お約束というわけだが、今この状況下で誰もそんな甘い考えはなく、いかにこの死地を乗り越えようか、全員が頭をフル回転していた。

「今日の訓練も大変だったな、出久」

「そ、そうだね、国木さん」

そんな中、一人ゆったりと備え付けのベンチに座る男——国木の言葉に緑谷は動揺を隠せない様子で返事をする。

「まさか、先生からの無茶ぶりには参るよな、焦凍」

「あ、ああ」

今日のことを思い出しては、しきりに頷く国木だが、何故か更衣室の横を陣取る形でスタンバっている。

その隣には脱ぎ捨てられた上着が置かれており、ほんの数秒までは国木が着ていたのだ。

だが、国木の言葉で事態は刻一刻と破滅へと進んで行く。

「しかし、今日は暑いな……ぶっ壊れているんじゃないか太陽」

そう言つて国木はシャツを脱ぎ捨てて、上半身はブラのみとなる。

その行動に峰田からは、押し殺した悲鳴が上がり、尾白の尻尾は尻の辺りで丸まつていく。

そう、これが今日の国木ゲームである。

既に1ーAでは常習化している魔のゲームであり、もしも対応をしくじれば、おしおきサウナの刑が待っている。

現在、おしおきサウナの刑を喰らつたのは全部で三人、普段の行動が仇となり、紳士としての調教として刑を喰らつた峰田と上鳴のお馴染のコンビ、そして名前がおしりに似ているということで完全な誤爆を喰らつた尾白である。

特に完全に非がなかったのに刑を喰らつた尾白の恐怖は尋常ではなく、先程から異常なまでの痙攣が全身を襲っていた。

ただ三人とも最悪の状態? になったわけではないので、もしかするとおしおきサウナの後には何か待っているかもしれない。

未知の恐怖に怯える15人に対し、国木の圧力が強まっていく。

「だが、それもヒーローになるための試練、そう考えれば励みになるつものだ。そうだろ勝己?」

「……」

何故か妙に良い笑顔で、良いことをいう国木に全員が苛立ちを隠せなかったが、ここで動いた者は負けだ、全員が理性を働かせてその場で踏ん張る。

現に煽られ耐性0の爆豪ですら、国木に対しては噛みつくこともせず無視を続ける。

これは、初めの訓練の時に国木に組み伏せられたトラウマかわからないが、話しかけると尋常ではない冷や汗を流す幼馴染の姿に、緑谷は同情を覚えるも、口に出すことはしなかった。

「ところでこの後、皆で野球でもしないか? チームスポーツは全員に共通意識を芽生えさせることができる。クラス一丸になるためにはいい儀式だと思わないか?」

余りに飯田好みの言葉だったため、思わず乗ろうとした飯田を隣にいた切島と砂藤が全力を持って抑え込む。

ナイスプレーと思わず叫びそうになった緑谷だが、危機はまだ脱していなかった。

飯田に抱き着く形で止めに入ったのが不味かったのか、眼を輝かせた国木が三人に歩み寄ると全員の肩を抱く。

「ははは、既にこのクラスは一つになっていたな。しかし、鋭児郎と力道もだが、皆良い体つきになった。俺好みだ」

そう言つて三人の尻を軽く叩いて再びベンチに座る国木を見て、全員が危機を乗り切つたことに安堵の息を吐く。

「しかし、今日は暑いな」

そう言つて下を脱ぐ国木、これでブラとパンティーだけになった。

現時点でも絵面はアウトだが、ここにいるメンバーは知っている猶予はあと二回ということを。

故に、全員が今できる最大限の力で脳をフル回転してこの危機を脱しようと思考に耽る。

『暑い』という単語が出ると一枚服を脱ぐのが、今日の国木ゲームで解つていることだ。

つまり、あと二回『暑い』と言う言葉を国木が発した時点でゲームオーバーである。ならば、如何にこの言葉を言わせないことが、このゲームに生き残る条件ということ

を理解し、緑谷は国木に視線を向けた。

「しかし、本当に今日は暑いな」

ブラを脱ぎ捨てた国木。

このゲーム、だめかもしれない。

全員がそう考え、脱出を考ええる。

出入口は駄目である、高確率でフィジカルお化けの国木に捕まるだろう。

ならば、窓はというところまで大きな窓ではなく、人が一人通れるくらいの大きさである。

つまり先着順、逃げ切った者が勝ちである。

先程まで全員で危機を乗り切ろうと考えていたにも係らず、今は全員がこの場から我先に逃げようとしている。

それでもヒーロー科かっ!!

思わず足を止めた緑谷は気づいた。

自身の敗北を。

「それにしても、やっぱり今日は……」

そう言つて最後の聖域に手をかける国木。

緑谷はその光景を眺めながら、オールマイトに出会った日から今日までの出来事を思

い出す。

オールマイトに認められ、個性を得たこと。

実技試験で、両足と右腕をへし折っても麗日を助けることができたこと。

見事入学を果たし、校門前で立ち竦んでいた自分に、国木が尻を叩いて前を進ませてもらったこと。

最初の授業の時に、組み伏せられた幼馴染を助けようと、国木を殴ったこと。

そして何故か、その後、一瞬のうちに国木に組み伏せられ、オールマイトに止められなかったら、貫通していたかもしれないこと。

ヴィラン襲撃の際に、何故か肌を艶艶にさせた国木が、脳無相手に一步も引かなかったこと。

体育祭一種目目の際、国木の吐息がスタートからゴールまでずっとついていったこと。

二種目目の国木が何故か、異常なまでに騎手になりたがっていたこと。

三種目目の一騎打ちの際、自分に勝った轟の氷を、国木が服を犠牲にして無傷で生還したこと。

その後、国木さんの国木さんが全国ネットに流れることとなり、校長と相澤が謝罪会見を行ったこと。

「殆ど国木さんじゃないかつ!!!」

思わず叫び声を上げる緑谷。

彼は知らず知らずの内に、助けたい気持ちより。勝ちたい気持ちが強くなったとき、幼馴染の影響で言葉が悪くなるのだ。

そして、一手導き出すことに成功した!!

「轟君!!」

「っああ!!」

それはまさに奇跡の反応だった。

「暑……冷たっ」

それは逆転の発想。

暑いなら、涼しくすればいいじゃない。

轟の氷結により、全身が氷に覆われた国木だが、次の瞬間氷像は崩れて、生まれたての国木が現れた。

「おいおい……なんだーい、お気づきだったってわけかい？ 俺が暑いから服を脱いでるわけじゃないってことにさ！」

正解と言わんばかりに、拍手をする国木はゆっくりと立ち上がる。

「ビンゴー！ 今日はその洞察力に免じて引いてやろう」

笑いながら国木は緑谷と轟の尻を叩く。

「ケツ拾いたな」

そして出ていく国木は、もう更衣室に返ってくることはなかった。

残されたのは静寂と湧き上がる達成感、そして

「「「 やった!!!!」

「「「

大いなる安堵感である。

「すげえよ、お前らっ!!」

「まさに間一髪ってやつだったな!!」

全員が喜びを爆発させ、功労者である緑谷と轟を胴上げし始める。

その行為に思わず緑谷は涙を流し、轟はクラスに馴染めたことに安堵の笑みを浮かべる。

だが、戦いはまだ始まったばかり!!

負けるな、雄英高校!!

負けるな。 1—A!!

完。

「お前ら、いつまでチンタラやってやがる……」
「「「すみませんでしたっ！！！！」
「「「」